THINKING RUGBY 2001　Running Handling GAME　への方向づけ

第３章　Sense　(FLAIR AND POWER)：effective から wise へ

ラグビーは「紳士のスポーツ」であるとか、「ラグビー精神」という言葉を聞くことが少なくなりました。それらは戦って勝つために必要なものではなく、どのように戦うかという内面的なものだからでしょう。 Rugby Sense についても、話題になることが少なくなりました。情報が溢れていて、消化するのに精一杯で、考えている暇がないというところでしょう。時代の流れや社会の変化によって、人間の考え方が変わるということは自然なことですが、人間の本性に係わるセンスについて考察することから、ラガーマン美学に迫ることが、ラグビーを楽しみ、ラグビー人生を豊かにするのに役立つものと考えます。

幕末の坂本竜馬に男の行動美学を求める人は数多くいます。激動する幕末を駆け抜けた竜馬は、小事にこだわらず、物事の本質を鋭く掴んだ人物でした。信念をもって、大事に立ち向かった行動力と才能に心から賞賛の言葉を送るものです。

スポーツをする心構えとして、スポーツマンシップという言葉は古くから一般に使われています。ship は名詞について［状態、身分、関係、職、術］などを表す抽象名詞をつくるものですから、sportsman-ship となれば、運動家精神、競技精神という意味です。これは全ての競技について必要なことであり、根底になっているものです。普遍的部分にラグビー独自の部分を加えて考えていきましょう。

冒頭に述べた、ラグビーの発祥における輝ける反則は、若者の迸る情熱を物語っています。勝利に対する若者のエネルギーは創造的で、その劇的なプレーは flair から生まれたもので、規則を越えて新しいスポーツを生み出しました。いつの時代でも、若者のエネルギーと情熱は社会発展の原動力です。それはフットボールというスポーツの power という要素に、知恵と興味を加えることから始まり、今日まで発展の一途をたどっています。

1960～70 年代に現代ラグビーが画期的な進化発展をとげるわけですが、flair の重視が基盤になっています。スクラムをコンパクトに固形化し、ラック・ モールの導入によりゲームを流動化して、un-formula への道を開きましたが、一方でラグビー界はコーチング先行の時代を迎え、プレー研究にくわえ、医学・体育学などの進歩からフイットネスの充実がはかられ、体力能力の向上がみられ、ゲームは著しく powerful になり、1980～90 年代は power の時代になりました。1974～75 年の COACHING SCHEME に指導の要点として、flair についての 1 項目があります。

Will coaching stifle flair?

Bad coaching certainly will but that is another story! Look at it this way. If a player in your side had a magnificent side-step when what you have to do is to so organise your players that the player with the side-step has the best possible opportunity of using it. It makes sense really. It is no good him side stepping all over the place wasting his energy. One side-step at the right time and then linking up for a try is much more effective.

ラグビーもグローバルスポーツとなり、スピーディで変化に富んだ楽しい物となり、W杯も始まり、プロ化も進み、natural instinctive を言葉にするところまできました。そこで、改めて Rugby Sense について考察することから、個人の問題としてセンスを養うという課題に迫るとともに、明日のラグビーを考え、ラグビーの普及発展をめざすことによって、ラグビー愛好者の増えることを願うものです。

センスということについて視野をひろげてみると、ベストドレッサー賞なるものが浮かび上がってきます。服装の問題だけではなく、堂々としていて、ゆとりがあって、賞をうける長嶋監督や石原慎太郎知事が壇上に上っている姿は、豊かな人間性がみなぎって居て、さすがという気持ちにさせられます。さりげなく、活動力がみなぎっていて、じっくり装いを観賞させてもらうと、確かに垢抜けし、ぴったりとしてシックで、落ちつきがあって、絶対に借りものでない気風がある。品質はよいものだろうが、極端に高価というのでもないのでしょう。人柄やムードなどいろいろな要素があり、まさにセンスの問題言うべき深さがあります。

SENSE・感覚という意味に広く使われるが、視覚聴覚触覚などに関わり、差異はあっても誰でも持っているものです。五感は本来生まれついたものですが、今考察するのは作用面での働きを言う場合で、正確には sensibility 感性ということになります。常識は common sense であるが、sense だけでも常識とか思慮分別という意味にも使われます。思慮分別というものは、多くの人間の集合体である社会で、人間対人間という関係のなかで必要とされるものです。回りから見られている自分を考えることも大切なことです。自分をつくることが課題になり、その元になるものがセンスです。

センスは理屈ではなく感覚の領域が大きいです。美術の世界は勿論ですが、スポーツにおいてもセンスは力と同様に大きな領域を占めています。ラグビー発祥のところで書いた flair という言葉は、鋭い眼識、第六感、才という意味です。すばらしいひらめきを指す言葉です。

センスの段階表現は、「センスがない」が最下位のもので、続いて「センスが悪い」となり、更に「普通のセンス」が次にきて、最上位が「センスがよい」となる。普通の域を越えた場合に、天才的という表現をするが、W杯で、ＮＺの監督がフランスチームの戦いぶりを評して「すばらしい天分・natural instinctive」の備わった選手たちと評したのは、非常に高いレベルのことを言ったものです。

人間の能力には普通には限度があり、それを越えたものである場合に「動物的」という表現をすることがあります。それは instinctive 以上のものを指すものです。一種の動物である人間は、原始時代には、現在からは想像できないほどの五感能力を持っていたと論証されています。その後、知恵と文化で高度の社会を形成してきましたが、一方、人間が進化の過程で失った能力も大きいのです。狩猟生活をしていた人間は、走る能力が今より格段にすぐれていました。変遷する段階設定について考えてみましょう。オリンピック発祥当時、42.195km を走るのに要した時間と現在の記録を比較すると、昔の天才的記録も常識になってしまっているのです。人間には進化もあれば退化もありましたが、人間社会で生きていく上で必要であるか、又は不必要であるかがその決め手となりました。夜暗い中でも物が見える能力、遠くの音を聞く能力、微妙な違いも嗅ぎ分ける能力など、現代の人間と比べることができない程強力なものを持っていたのでしょう。

ラグビーで時に使われる動物的センスとは、獰猛なことではなく、読み（イマジネーション）による、位置取りの良さからの運動量の卓越さを指しているもので、flair, power の極点をいったものです。走るセンスのあるプレヤーは、伸び伸びと走り、走る速さとボールを持って安定感があります。そして、よく走るということと、次に直感的とひらめきと勘で、意外性をもって、固定的でない展開を先読みして反応していく。センスのあるプレヤーの動きは無理を感じさせないし、苦労の結果という重さを表に感じさせないものです。

「センスを養う」という題目に入りましょう。センスは本来先天性のもので、表に現れる場合と、埋もれたままの場合もあります。本来生まれつきのもので素地は出生そのものに関わるとはいえ、生育過程で親の養育環境の影響が大きいと考えられる場合もあります。例えば美意識なども、常に美しいものの中にいれば自然に育つものであり、見て感じて成長する生活の過程でセンスを養われるものです。良いものを見せたり、良いものを示して志向させることによって養える過程は、「氏より育ち」といわれるものです。

センスを育てるには、大きくは適切な環境を作ることです。そして、平素右脳によるラグビーを心がけ、ひらめき、発想の柔軟性を培うことです。左脳は理論的なものですから、右脳を使う訓練と習慣が大切です。言い換えれば、五感をフルに働かせたプレーを心がけることです。それは、身体全体をフルに働かせたプレーということです。

センスが教育や反復練習で習慣のようになって身について、後天的要素の割合が大きい場合は養われたものと言うべきでしょう。その場合、センスは、土台となるスポーツマンシップや、伝統や友情という精神的なものの上に築かれるものであって、平素の生活心構えや習慣がものをいうのです。土壌に蒔かれた種は水分と熱がなければ発芽しないように、希望が水のようにひらめきや勘を引き出し、推奨・賞賛していく環境が熱にあたるものです。好きこそものの上手なりというのは、楽しくやることが必要ということを物語っている。楽しいから一生懸命になり、長続きするのです。繰り返すことによって反射神経が発達していくのです。好きであるということは、センスがあると考えてよいのです。

センスの考察のまとめは、ラガーマン行動美学に戻りましょう。小事にこだわらず、本質を鋭く掴み、信念をもって、大事に立ち向かい、反省の無いままに伝統に固執し、power だけに頼り、勝負に勝つことだけに熱中する愚かさを避けて、美学を具現する目標を掲げてラグビーに打ち込む誇りをもつことを忘れては生涯スポーツとして悔いを残すことになるでしょう。

仏法で説く大きく丸い心は「かたよらない、こだわらない、とらわれない」ものを言いますが、目標に、偏り・こだわり・とらわれる楽しみ方にこそ、美学があり、満足感を得られるのです。